

美しい書体はいらないのか

「六万四千漢字」発表会で考えたこと

小宮山博史

六月十七日の東大と日本学術振興会の「六万四千漢字」発表会に出席し、説明を聞きながらいくつかの疑問と感想を持ちました。これはあくまでも「デザイン表現」の範囲内での疑問であり、感想です。

当日配布された資料中、「六万四千漢字」の姿形が見えるものは

- (1) 「GT新明朝字形サンプル」と題されたもの
8字7サイズ……平成明朝体W3と比較
- (2) 「GT新明朝字形サンプル（大漢和辞典「雨冠」）
356字……「雨」より「霽」まで

「多国語プロジェクト」メンバーの一人である山口明穂氏はこの「六万四千漢字」について、発表会の席上、次のような発言をされました。

- (a) 「画数がわかるようにしたい。」
- (b) 「美しいものはいらない」そして「私たちにはきれいな字ができるはずはない」

提示された二種の資料をもとに(a)(b)について考えてみます。

- (a) 「画数重視によるエレメントの変更」

明朝体は文字をある一定の様式でデザイン化したものですが、山口明穂氏が躊躇し、変更を指示されたように、元来、「画数の表現」という概念は稀薄です。それが、この書体の特徴的なデザインであると言うこともできます。

「明朝体の様式に画数がわかるようなデザイン要素を加える」という方針は

制作者の造形上のコンセプトであり、デザインはそのコンセプトに従ってなされます。使用者はそのコンセプトを受容した上で、その結果の造形が優れているか、劣っているかを冷静に判断することになります。

確かに「六万四千漢字」(G1新明朝)でデザインが今回急遽変更された「ㄥ」「ム」「レ」「ム」は実際の画数と視認される画数では差があります。これらのエレメントを「ㄥ」「ム」「レ」「ム」のように画数と合致させることはデザイン表現上の一つの見識であろうと思われます。

このデザインは、中華人民共和国国家標準である GB 2312『信息交換用漢字編碼字符集』に提示の漢字と同じであり、また、中華民国教育部が示す国家標準字体とも同じです。画数表示をデザインに反映させれば、このような処理が当然だと思われませんが、この考え方をおしすすめると、上記のエレメント処理で終わるのではなく、他のエレメントも上記方針にならなければならなくなります。

例えば、当且配布された上記(2)の資料中の「OAEV\42212」というコードを与えられた「零」の「ㄥ」の「ム」の部分は画数でいえば一画ですから中華民国が採用する「ㄥ」とする他ありません。あるいは中華人民共和国が採用する「ㄥ」のよつに「ㄥ」を180度回転した形に近くする他ないかもしれません。これは「出」(OAEV\42252)も同様で「ㄥ」として、左の縦線の下と右の縦線の下を明確に区別するデザインを採用するのが順当だろうと思われます。今「六万四千漢字」のサンプル「雷」を見ますと、左と右の縦線の下はほぼ同じ形で同じ長さで横線より下に出ています。これはデザイン上の統一あるいは差別化という面で言えば不充分であろうと思います。

次に、「シンニエウ(ㄥ)」はどうするのか。「ㄥ」印の部分は「左から右」のエレメントか「右から左」へのエレメントかをはっきりさせなければならないでしょう。隷書を念頭に置けば、「ㄥ」右から左下へ入り折り返して右へハラウわけですから「右から左」が正しい。しかし、明朝体でそれを意識できるかどうか。現行明朝体では四画に見えるデザインにしています。これをはつき

りさせるには中華民国の方式がシステムとしては納得できます。「ㄣ」あるいは「ㄣ」でしょうか。これをひろげますと、コード OAFB8\42237 の「ㄣ」の「ㄣ」左の打ちこみはどうするのか。取ってしまうのかという議論にまでいつてしまいます。この打ちこみを維持し、一画に見せるのなら「ㄣ」と頂上部分を丸くする他ないかもしれません。「女ㄣ」を「女」とするのは画数表示という前提を守れば、「G T 新明朝」が取り入れたデザインになるでしょう。これは中華民国のデザインに近い。「ㄣ」は三画を表示するために「ㄣ」としてありますが、その突出度合いが小さく、72ポイントでも判別しにくく、もっと小さなサイズに印字されたなら、とても判別できないと思います。しかし、このデザインは中華人民共和国も中華民国も採用してはならず、また明朝体史で今まで出現したことのない処理で、「G T 新明朝」独自のものではないでしょうか。

発表会当日の説明では、「画数への配慮からデザインの変更をおこなっている」とのことでしたから、いただいた資料は制作途中と解釈し、完成後のデザインを待つて総合的に考えてみたいと思います。画数を意識した明朝体のデザインは造形上バランスがむずかしく、これはむしろ楷書で表現した方がやさしいし、かつ美しいものができると思います。ただし、デジタル通信に楷書体が適するかどうかの検証は必要となります。

(b) 「美しいものはいらない」のか、「私たちにはきれいな字ができるはずはない」のか

山口明穂氏がなぜこのような発言をされたのか、その意図は何であったのか。確かに山口氏、片山英男氏、坂村健氏、青柳正規氏、田村毅氏は書体デザインそのものを意識することはかつて無かったかもしれません。そのため正直でかつへり下った表現として上記の発言になったのであろうと想像いたします。

しかし、ここで考えてほしいと思うのです。この「六万四千漢字」は「多国

語プロジェクト」のメンバーの方々のプライベートフォントであり、自分たちだけで使い、他者に金銭を代価として販売するものではなく、その開発費はメンバーの自費である、閉ざされたものであるのならば、「わかれば良く」「美しいものはいらぬ」という論理は成立します。しかし、このプロジェクトは開発費として、建設国債の中から、日本学術振興会を通して、すでに二億円が支払われ、かつ多くの人々と報道関係者を招いた発表会を開いている以上、これはプロジェクトのメンバーの「私的なフォント」という位置づけではなく、「公的なフォント」と位置づけることができます。

例えば、山口氏が私的で、外へ出すことのない国語辞書を編纂したとすれば、それがどんなに間違っている人も人々に悪影響を与えることはありません。それがひとたび販売されれば「正確なことはいらぬ」「私たちには正確なものができるはずはない」と言えるでしょうか。

例えば、田村氏がフランスの小説を訳し、それを書籍として販売するときに「正しい翻訳はいらぬ」「私に正しい翻訳ができるはずはない」と言えるのだろうか。

例えば、坂村氏がコンピュータソフトウェアを開発し、それを市販するとき「ちゃんと動くものはいらぬ」「私には正確に動くものはできるはずはない」と言えるのでしょうか。

上記の例は、メンバー各自の本業ですから、私的であろうと公的であろうとそんなことは言わないでしょう。では「六万四千漢字」は本業ではないのか。日本学術振興会理事の佐藤國雄氏は当日の挨拶の中で十二月の販売をいい、利益をもたらしてほしいと話されました。市販し、利益を生み出すとする以上この「六万四千漢字」はメンバーの方々にとって意識は本業と同じでなければならぬはず。本業であるなら誠意をもって作るべきでしょう。山口氏の発言に他のメンバーの方々は何も感じないのでしょうか。この場合、自分たちにデザイン評価ができなければ、できる人をメンバーに入れれば良いだけです。デザイン評価ができる人がいるから「六万四千漢字」が造形できたのではない

でしょうか。山口氏の発言は「六万四千漢字」を実際に作った担当者に対し、礼を失していると言われても反論はできないはずです。

「すこしでも良いものを作る」という意識がものを作り出す側の最低限の良心ではないでしょうか。最初から良心を捨ててしまっている態度は何なのでしょうか。

こう考えてくると、この「六万四千漢字」の制作者側には書体のあるべき姿を考え、それにそって計画を立て、実制作する人は誰もいないのだと気づかされます。皆で寄ってたかって悪い書体を作り、だれ一人悪いものと思っていないという恐ろしい環境で、この書体が今後どう生き抜いていくのか。

私は書体デザインを本業としています。良くない書体は良くない、良い書体は良いと正直に言うべきだと思っていますし、またそういう評価・批判に謙虚でありたいと思っています。冷静な評価とそれによる修正が、良い書体を生み出すきっかけになります。「人々にすこしでも良いものを提供したい」という制作者側の最低の良心だけは捨てたくないと思っています。

田村毅氏の「多国語プロジェクト」のアイディアは近い将来にどうしても必要となるもので、私もその発想に賛意を表します。すべての言語が同じ重みで平等に混植できるというコンセプトこそ、書体が今まで持とうとして持ち得なかったもので、これからの書体はそうあるべきだと思っています。しかし、その発想は専門家の欠如によって、ずい分と違った方向に進んでいるのではないのでしょうか。そんな危惧を発表会で持ちました。